

巻頭言

東京農業大学教授

藤本 彰三

山間農業地域とは「林野率が八十%以上、耕地率が十%未満」、中間地域とは「平地農業地域と山間農業地域の中間的な地域で、林野率が五十%、耕地は傾斜地が多い」地域と定義されている。全国で約千七百市町村が中山間地に該当し、総耕地面積の四割が位置する。つまり、中山間地域は食料生産の重要な担い手である。グリーンツーリズムなど、中山間地の効用は農業生産に限定されない。たしかに里山を背景にした山間地農村は美しく、日本の原風景ともいえる。

しかし、現実には広範な中山間地が苦悩している。次世代の担い手が市街地へ移り住み、農業だけでなく農家そのものの後継者が不足し、過疎化が進み、農民は高齢化し、農村機能の維持も難しい状況だ。政府は直接支払制度によって支援しているが、問題は解決できていない。全国三十四万ヘクタールの耕作放棄地のほとんどは中山間地に位置している。放棄された棚田は美しい景観とは

いえない。

上越市の面積は十万ヘクタール弱で、その十八%が耕地、五十六%が森林面積である。この二つの数値から上越市は中間農業地域に位置することになる。上越市の食料農業農村基本条例では、農業地帯を市街化地域、田園地域および中山間地域の三つに地域区分し、中山間地域では環境保全、災害防止機能を強化させ、棚田ではハサ掛け米など自然特性を生かした産業を促進することを通じて国土保全を図るとしている。

東京農業大学は、学術フロンティア研究において平成十七年から桑取谷浜地域で有機栽培実験を行い、研究成果の実用化と地域振興を目指して、平成二十年四月に株式会社じょうえつ東京農大を設立した。もちろん地元農業者、産業界、大学教職員や校友など実に多くの方々の協力があつて始めた壮大な社会貢献事業である。当地域には多くの耕作放棄地が存在しており、弊社は十ヘクタ―

ルを再開発して有機農場経営を開始した。当地の特異な自然生態系を活用して環境と健康に優しい食料を生産し、高付加価値農業を実現するには有機農業が最適と考えたからである。幸いにも弊社の取組みは全国評価を受け、本年五月に第三回耕作放棄地発生防止・解消活動表彰事業で全国農業会議所会長賞を受賞した。耕作放棄地の更なる再開発の決意を新たにした次第である。

上越市農政の基本計画にあるように、当地域ではハサ掛けが今日でも一般的に行われている。上越市内には他にも中山間地が多い。昔ながらの農業を「自然特性を生かした産業」に発展させるには、まずは耕作放棄地を再開発して自立できる農業経営の確立が必要である。そのためには多くの消費者の支援が不可欠である。

(ふじもと あきみ 上越市原町出身)

